

2020 年 12 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより
特別号
Vol. 8

「今、この時に、親鸞聖人に会う」
「人生は仏道なり」

金沢教区第7組順教寺 細川 公英氏

◎『教区だより』特別号 について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、5月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号
というかたちで発行してまいりますので、教区
の皆様には、ご理解いただきますようお願いい
たします。



※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に向直し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いますが、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思えます。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に会う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長 日野 隆文

「今、この時に、親鸞聖人に会う」

「人生は仏道なり」

金沢教区第7組順教寺住職 細川 公英

よき人との出遇い

本年は宮城顓師、松本梶丸師の十三回忌にあたる。人生に両師との出遇いを賜わり、私にとってかけがえのない聞法道場順教寺において先生のご法話を聴聞させていただけたこと、またそのご法話をまとめた冊子を出版させていただけたことが何よりの宝物である。法話集の文字が生きた声となって心に響いてくる。そのお声はよき人の仰せ「汝、念仏申せ」となり、今もなお怠惰な私を聞法の場に引き寄せてくださる。

大学卒業後自坊に戻り、これからどうしていいか分からず戸惑っておるとき、たまたま松本先生のご法話を聴聞するご縁を頂戴した。その一言ひとことが身に響いてきたことをはつきりと覚えていた。後日先生の御自坊で、当時抱えていた問題についてお話をさせていただいた。先生は黙って私の愚痴をお聞きになり、最後に「聞法会を集まってこれらる人の数ではなく、細川さんの学びの場として地道に続けて下さい。親鸞という、すごい人をいただいているということは根本的な幸せです」「ともに聞法いたしましょう」とお声を

かけてくださり一枚のはがきを頂戴した。それは宮城顓先生が講師をされている「浄土論註の会」の案内状で、一九九七年二月（第一三四講）と記されていた。私にとつてはじめての継続的な学習会のご縁だった。

今、この時—コロナ禍の不安な時代を生きる

今年の北原白秋を偲ぶ「白秋献詩」の文部科学大臣賞を受賞された中学二年生の「からっぽの箱」という題の詩に感動を覚えた。コロナ禍ということばが日常語となった今、世界中のだれもが心にいだいているに違いないさまざまな不安や生老病死、孤独の苦悩という人間存在の叫びを代弁してくれているように思う。

これまで私たちが築いてきた価値観・常識・生活が根底から崩れ、表にあらわになったものは生きることの息苦しさや空虚感である。「からっぽの箱」の中で不安に怯え生きる意欲を喪失した自分自身に出あったのだ。

「禍」という漢字には次のような意味がある。「示と、音を表す畀（おとしあな）の意」とで、神がくだすとがめ、「わざわい」の意を表す。『福武漢和辞典』。ここで「おとしあな」という指摘に注目したい。落とし穴は、深い井戸をイメージするとわかりやすいが、暗く閉ざされた世界だ。人間の理知分別・自己固執の世界と違っていいかもしれない。その場はいのち本来のぬくもりを奪

い、都合の悪い者を排除し無視し自己関心のみに生きる人間を生みだす。

今コロナ禍を縁としてたまたま不安や苦悩がはつきり表面にでてきたが、それまでも「からっぽの箱」「落とし穴」を生きてきたのだ。ただそのことの認識がなかっただけだ。私たちは自分の理想を思い描きそれに向かつて努力する。その立場は、不安や苦悩は邪魔なものでしかないの、それらを解消する方法を必死に探す。あるときはそれ自体を見ないように蓋^{ふた}をしたり、またその解決に宗教までも利用する。お祈りするから自分の不安をなくしてほしいと願う、ギブ・アンド・テイクの信仰だ。しかしこれらは根本の解決にはならないばかりか、ますます迷いを深める結果となる。それほどこの「落とし穴」は闇が深く底なしである。またこの落とし穴の怖いところは、いつの間にかそこを居心地がよい場（自己満足の世界）に変質させてしまう。

「至徳の風静かに衆禍の波転ず」

今述べたように私たちの理知分別の世界は必ず行き詰まる。しかしその「落とし穴」（穢土）を下から支えてくれる大地に目覚め、落とし穴を生きる身に徹底的に関わってくれる「はたらき」に出会い、そこを抛り所として人生を歩まれた人々がいた。その「はたらき」こそが本願念仏のはたらきである。つまり念仏者が誕生してきた歴

史である。その仏道の歴史を浄土真宗という。

その本願念仏の歴史に出遇った慶びを、親鸞聖人は「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍^{しゅか}の波転ず」『教行信証』行巻 聖典一九二頁）と讃嘆しておられる。南無阿弥陀仏申す身に賜る功德である。これは苦悩の穢土から逃げずこの身のままで歩ませていただける道が確かにあったという感動の叫びだ。

親鸞聖人は「禍」を「衆禍の波」と表された。「衆」は多くのという意味で、内と外から予期せぬ波が絶え間なく身に襲ってくるというのだ。時にはいのちそのものまで奪ってしまうような大波が押し寄せてくる現実^{じつ}に宗祖も直面したに違いない。

しかし、お念仏にはその衆禍の波を転ずるはたらきがあるという。転ずるとは波がなくなるということではなく、どんな波（不安・行き詰り・絶望）を生きるものであろうとも必ず本願の世界に帰らされていく。お念仏申すところに衆禍の波を縁として生きる「煩惱成就の凡夫」の自覚と慚愧心^{しんき}がわが身に開かれてくる。その身の事実をそのまま受け止めてくれる世界が仏法の世界である。不安を解消する必要などなかったのだ。宗祖は「衆禍の波」を拝む世界に出遇われたのだ。

「不安はわたしのいのちやもん」

宮城先生がよくご講義のなかで山崎ヨンさん

という方の「不安はわたしのいのちやもん。不安とられたら生きようがないがないか」という御言葉を紹介していただいたことを思い出す。これは松本先生が著書『生命の大地に根を下ろし』（樹心社）のなかで取り上げてくださったものだ。山崎さんは決して強がり^{おっしや}で仰ったのではない。まさにお念仏に生きておられる方の人生に対する力強さと謙虚さをこの一言は見事に表している。

生涯の問い・課題を賜る

よき人は私に仏法聴聞の大切さと難しさを、全身をもってお示し^{しめ}くださった。「この道を尋ねて行け」と背中を押してください。南無阿弥陀仏のいわれと人間の根源的な課題は何か、生活のすべてを具体的な縁としてわが身に聞思していく。そして時代社会からの問いかけ（外からの声）に謙虚に耳を傾ける。そのことが仏法聴聞の大切さである。一方、仏法を自分勝手に解釈し、他人事としてわが身自身の問題と受け止められない自力執心の問題が難しさであろう。

人生はよき人との出遇いの連続であり、苦悩の身に発起する本願念仏の信心に仏道が開かれることを教えていただいたことが何より有難い。

南無阿弥陀仏

教務所からのお知らせ

《得度》

二〇二〇年十一月六日付

山城第一組 寶蓮寺 佐々木晴香

山城第二組 慶念寺 權藤 絢子

近江第二十六組 良因寺 岡本 悠誠

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第一組 正徳寺前住職 栗田 一成

二〇二〇年九月十一日 九十四歳

近江第六組 福泉寺前住職 藤井 暉

二〇二〇年十月二日 九十歳

近江第十組 教圓寺前住職 大森 怜

二〇二〇年十月十三日 八十八歳

近江第二十五組 慈専寺前住職 高木 元昊

二〇二〇年十一月五日 八十一歳

〔敬称略〕

《二〇二二年 春期教師試験検定》

期 間 三月六日(土)～七日(日)

場 所 真宗大谷派宗務所

科 目 真宗学・仏教学・教化・声明作問

出願期間 十一月十七日(木)～二十四日(木)

※出願書類は京都教務所に提出ください。

検定冥加金 七五、〇〇〇円

(出願書類とともに納入ください)

※科目別受験の場合、冥加金は一科目につき一五、〇〇〇円です。また、口述試験は科目には含まれません。

詳細は『真宗』誌十一月七七頁を参照ください。

《年末・年始の事務休暇について》

年末・年始事務休暇として、左記の期間は教務所事務の取り扱いを休止します。

緊急(期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は緊急に含みません)の場合、左記緊急連絡先までご連絡いただきますようお願いいたします。

〔事務休暇の期間〕
二〇二〇年十二月二十九日(火)より
二〇二二年 一月 五日(火)まで

〔緊急連絡先(教務所携帯電話)〕

〇九〇―三七一九―七九八二

駐在日記

貼っているだけで24時間教化活動をしてくれるお寺の伝道掲示板が、今注目されている。2018年の「輝け!お手の掲示板大賞」は「おまえも死ぬぞ 釈尊」、2019年は「衆生は不安よな。阿弥陀動きます」だった。仏光寺の南の塀にかけられている有名な掲示板は本当に巨大で目を引く▼元同僚の竹原了珠氏(能登教区)に教えていただいたのが、法語を書いたカードをたくさん用意し、ご門徒みんなで回し読みして各自一枚選び、その法語を選んだ理由を話すと自然と座談会になり、その中から一つ選んで誰かが利き手ではない手で書く活動。誰が書いても味のある字になり、竹原氏のお寺は田舎で人通りはほとんどないけれど、それでもみんなで作る掲示板は話題になっているそう▼教区会館の前の掲示板も昨年の春から法語を貼り出しているが、私も利き手ではない左手で書いてみた。上手なくて当然という意識があるのでさらさらと書ける(速さはたぶん書道家並み)。確かに味があり、何だか勢いもある(上手とか上手でないという世界から逸脱している)。立ち止まって見てくださる人も多い(この字はなんだ?と思っている人もたぶん多い)。これが自分の字か?と感ずるので恥ずかしさは少ししかない(これは人にもよるかも)▼「書道」からすると論外かもしれないけれど、これなら私でも楽しみながらできる。私たち一人ひとりの発想には限界がある。いろんなアイデアや工夫は盗み合うことが大切なのだ。(駐在教導 谷本 修)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

「教区だより」 特別号 Vol.8

発行人 日野 隆文 (真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075 (351) 5260 Fax : 075 (351) 5256

発行日 2020 (令和2) 年12月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

